

文学の研究〔Ⅵ〕

— 日本文学と英米文学における自然観の相似点と相異点 (2) —

枋 原 知 雄

I

本日は、私の最終講義の為に、こうして貴重な時間をおさき下さいましたことを深く感謝しております。最終講義というものは、おそらく一生一度の事と思われるから、あらためて何か特に有意義な題目をととも考えましたが、又考え直して、今日まで五回、本学部の「社会学部紀要」に書き続けてまいりました文学論を続ける意味において、この題目を選んで講演をすることに致しました。一昨年度から本学部の「西洋文学」といわれる講座を受持つことになりましてから、英米文学を中心に、日本文学のことに触れて、文学論を学生諸君の参考の為にとも思い、第一回は「文学の研究（Ⅰ）—『文学とは何であるか』の難問と『鑑賞・批評』の課題—」，第二回は「文学の研究（Ⅱ）—『文学』と『言語』・文学（芸術）の言語—」，第三回は「文学の研究（Ⅲ）—異質文化接触の問題・外国文学の研究—」，第四回は「文学の研究（Ⅳ）—翻訳論・外国文学研究と翻訳の問題—」，第五回は「文学の研究（Ⅴ）—文学と自然・外国（英米）文学と日本文学における自然観—」¹⁾ について見解を述べて参りました。この講演はそれをうけて、更に文学と自然について考えてみようとするものであります。第五回では、日本文学と西洋文学（主に英米文学）にあらわれる自然観をできるだけ具体的に概観的に歴史的に書きましたから本日の講演に興味をおもち下さる方はどうか第五回の拙稿を合せお読み下さることを願います。そうすればこの問題の観点がいくらかでも明瞭になり論述がいくらかでも立体的になるかと思います。

本日の講演の方針と構成は次のように運んで行きたいと思います。London 大学にも関係のありました (London 大学校外講座の講師) “The

Elizabethan Shakespeare” の Editor でもあり “Poetry and Life Series” の General Editor でもあった William Henry Hudson (1862—1918) の著書の一つに “An Introduction to the Study of Literature”²⁾ というのがありましてその Appendix のⅡにある “On the Treatment of Nature in Poetry” の自然の分類の仕方を取りあげます。この文学概論は1910年出たもので少し古いですが、今猶一読に価するもので文学の基本概念を教えてください。Hudson は自然が詩歌の中に取り扱われている方法を10項に分類しています。完全な分類とは言えないかも知れないが、この分類に従って考察をして行こうと考えます。

第1は “The Poetry of Simple Delight in Nature”，つまり、自然に対する素朴な快楽。

第2は “The Poetry of Nature's Sensuous Beauty” 即ち、自然の官能美を歌ったもの。

第3は “The Metaphorical Use of Nature”，自然が比喩的（或は隠喩的）に用いられる場合、もう少し敷衍すれば自然が人事の比喩として用いられる場合。第4は “Nature as Back-ground”，自然を人事の背景として用いる場合。第5は “The Poetry of Association” 連想の詩、つまり “The Association with human events” 人間的事件と関連をする場合。第6は “The Poetry of Set Description” 「純粋な自然描写」，詳しく言えば耳目に訴える外界の事物をありのままに写生する場合。第7は “Nature contrasted with Man” 自然が人間或は人生と対照して詩に現われる場合。

第8は “The Indifference of Nature” 自然の無関心、無慈悲な態度。第9は “The Sympathy of Nature” 自然の同情と愛。第10は “The Subjective Treatment of Nature” 自然を従属的に取り扱う態度であります。私はこの10項目の分類に従って、外国文学(主に英米文学)と日本文学

に例をとって、なるべく具体的に解明してみようと思うのです。Hudson はその例を西洋のものに引いておりまして、アメリカ文学に触れることは殆んどなく、日本文学に関するものは勿論少しもありませんので、引例は私の見解によって引用するもので比較的私の好みができるかも知れません。

只、甚だ大切な事は、自然観の比較を簡単に公式的或は類型的に割り切ってしまうこと、そしてこの割り切ってしまうことの危険をおかさぬことが大切なのであります。およそ文学というものは、そして文学研究においては、人間を取り扱っても、自然を取り扱っても簡単に割り切てはいけません。割り切れなかったら余は切り棄てる。切り棄てれば割り切れる。けれども文学は割り切れなくて余ったところに重要なものがあるのだということを私は強調したいのです。そしていつもこの事が最も大切だと強調して参りました。³⁾ 学問として文学を研究するにしても、この事は実に大切な事と思うのであります。

II

さて、第1 “The Poetry of Simple Delight in Nature” 自然に対する素朴な快楽であります、これは、時に衝動的で、単純な穢れを知らぬ人間の自由な屋外の生活の中に感ずるもの。言わば、自然に対する子供のような新鮮な喜びであります。これは勿論古代の文学に多いのです。例えば万葉集とか英国の “Ballad” とかに多いのであり、“Father of the English poetry” (「英詩の父祖」) と呼ばれる Geoffrey Chaucer (1340?—1400) の “The Prologue to the Canterbury Tales” (1387—1400)⁴⁾ においては、“Prologue” は Nature そのもののように自然に、流麗に現われる。只、Chaucer の自然は英国的であるよりも、むしろ大陸的であるということに注意を向けなければならないと思います。即ち、troubadour の歌とか、北フランスのロマンスとか中世宮廷詩歌とかに共通の特徴があって、牧歌的な美しさに充された恋愛詩の背景としてふさわしい自然であるといってよいでしょう。恋愛詩の背景としてふさわしい自然の描写は日本の万葉歌にも多く発見できるのであります。「春の野に堇つみにとこしわれぞ 野をなつかしみ一夜寝にける。」⁵⁾ など、

この種の単純な喜悦の歌は多くあります。「うらうらに照れ春日に雲雀あがり情悲しも独りしおもへば。」⁶⁾ といえはもう素朴で単純な喜悦だけではなく、第5句は春の愁いのなかの孤独感とでもいうか、その深層の心理には現実に躊躇するわれと自由自在に大空を飛ぶ雲雀との対比となっています。ところが、単純素朴な喜び、あるがままの自然を楽しむのであるけれども、それは進めば自然と自分が合一の快樂境に参入することになります。例えば、John Keats (1795—1821) の有名な詩 “Ode to a Nightingale”⁷⁾ とか W. Wordsworth (1770—1850) の “To the Daffodils”⁸⁾ とか人の知るところであります。散文では Richard Jefferies (1848—1887) の “The Story of My Heart”⁹⁾ が詩情豊かなものであります。「明月や池をめぐりて夜もすがら。」(芭蕉) ともなると日本的だという感じがします。

第2の自然の官能美を詠った詩歌は John Keats に秀れたものが多く、古今独歩の地位を占めるといってもよいでしょう。前例の “Ode to a Nightingale” は自然の具体的な美に対する喜悦を現わしているばかりでなく、甚だ官能的な美を現わしている例であります。“My heart aches and a drowsy numbness pains” (「わが胸は痛み 官能はねむたき 麻痺になやむかな」(厨川白村訳)) ではじまり、“Full of the true, the blushful Hippocrene, With beaded bubbles winking at the brim, And purple-stained mouth; ……” (「醇正の紅なせる 神泉をたゞ 其の縁にきらめく泡は珠数に似て 注口紫に染まりたる大盃をこそ。……」(厨川白村訳)) の詩句を含んでいます。日本の詩歌にもこの官能美の現われたものはあります。例えば、北原白秋の詩歌に吉井勇の歌に見出せます。「思い出は首すぢの赤い螢の 午後のおぼつかない触覚のやうに、ふうはりと青みを帯びた 光るとも見えぬ光？」ではじまる北原白秋の「思い出序詩」の中に、又、白秋の次の歌の中に、「松脂のにほひのごとく新しくなげく心に秋はきたりぬ。」又、勇の次の歌に「薔薇の香にほひきたりぬ わかうどが涙ながしし物語より。」

第3の “The Metaphorical Use of Nature” (「自然が比喩的に用いられる」) は、自然から

寓意的な意味を見出す場合が多い。例えば、「詩経」は殆んど各章の初めに自然が人事の比喩として、又は序の形で紹介されるのであります。The Hebrew poets は自然を自然そのものの為に描写することは少く、多くは自然より寓意的な意義を見出したのであります。Matthew Arnold の “Sohral and Rustum”¹⁰⁾ にもこの種の比喩が多いので、この種の詩歌の場合は隠喩的になったり、人称化が行なわれたりする場合も生じて来るのであります。即ち、自然を象徴の具に供するのであって、例えば日本の表現の中に「荊棘の人生」と言うようなのであります。「敷島の大和心を人間はゞ 朝日に匂ふ山桜花。」(宣長)¹¹⁾とか「夏の野のしげみにさける姫百合の 知らえぬ恋は苦しきものを。」¹²⁾ (大伴坂上郎女)。P. Verlaine (1844—1896) の詩「落葉」は上田敏の名訳で人の知るところであります。「秋の日の キイロの ためいきの 身にしみて ひたぶるに うら悲し。鐘のおとに 胸ふたぎ 色かへて 涙ぐむ 過ぎし日の おもひでや。げにわれは うらぶれて ここかしこ さだめなく とび散らふ 落葉かな」自然の人称化は東西の詩歌には数が多く、英国の詩人でその代表のものを一つあげよと言われるならば私は Selley の “The Cloud”¹³⁾ (「雲」)を取り上げます。この隠喩的傾向が進むと象徴主義 (“Symbolism”)となる。例えば、W. Blake の “The Sick Rose”¹⁴⁾ (「病めるバラ」)をあげることができましょう。次に日夏耿之介の訳詩を示せば、「あはれ薔薇よ、おん身病めりけり。咆吼の嵐のなかを 夜の闇を翺りて ゆく 賭(み)えざる蠕蟲(はむし) お身が緋の耽楽の臥蓐(ふしど)をこゝに 見出でたり 夫(か)の 黒色極秘の愛の お身がいのちをぞ毀(こぼ)つなる。」

Ⅲ

第4 “Nature as Back-ground” 「自然を人事の背景」として用いる例も東西その数は極めて多い。ギリシャ悲劇にも、Shakespeare にも、そして18世紀の詩人はこれを常套手段として用いました。又、Thomas Gray (1767—1771) の詩、特に The Elegy written in a Country Churchyard¹⁵⁾、或は、Oliver Goldsmith (1730?—1774) の “The

Deserted Village”¹⁶⁾、又、旧約聖書では Ruth にも、そして Ruth よりも Esther に多いのであります。Alfred Tennyson (1809—1892) の詩 “The Idylls of the King”¹⁷⁾ (1859) にも “Enock Arden”¹⁸⁾ (1864) にも自然を背景とする用法があって、Enock Arden が落胆して故郷の海岸にたどりついた時、霧が海を包んで、世界を灰色にしている背景は人の知るところであり、これは同時に Enock Arden の運命を暗示するものであります。島村藤村の「破戒」にもこの用法をとったところがあり、George Gordon Byron (1788—1824) の詩 “Don Juan”¹⁹⁾ (1819 ((Cantos I—II)), 1821 ((III—IV)), 1822 ((V)), 1823 ((V—XIV)), 1824 ((ZV—XVI))) にも発見できるのです。例えば恋人との恋物語の場面は月夜と波の音のする海岸を配するなど。「源氏物語」¹⁹⁾で「若紫」においては春、「桐壺」においては秋となっているのもこの例であります。徳富蘆花の「自然と人生」²⁰⁾ 国木田独歩の「武蔵野」²¹⁾などは、まさに自然描写で成りたっている作品であるが、それは東洋的な山水逍遙の伝統に西欧自然詩人の影響をとり入れたもので新しい自然美の発見でありました。Thomas Hardy (1840—1928) の小説が Wessex Novels と呼ばれるように、Hardy の諸作品は、Dorsetshire 地方即ち Wessex という古い名のついている England 南部の自然が背景となり、その描写は精妙であることは読者の知るところであり、“Tess of the D’urbervilles”²²⁾ (1891) は有名な作品であります。

第5は “The Poetry of Association” 連想の詩つまり “The Association with human events” 人間的或は歴史的事件を通して、或はそれと関連して自然を観る例であるが、先づ Byron の “Childe Harold’s Pilgrimage: a Romaunt” (1812 ((Cantos I—II)), 1816 ((III)), 1818 ((IV)))²³⁾ の各所に発見できるし、前述の Goldsmith の “The Deserted Village” の中にも見出せます。

“Sweet Auburn! loveliest village of the plain, Where health and plenty cheer’d the labouring swain, Where smiling spring its earlist visit paid, And parting summer’s lingering blooms delay’d: ……

These were thy charms, sweet village!

sport like these, With sweet succession,
taught ev'n toil to please; These round
thy bow'rs their cheerful influence shed,
These were thy charms—But all these
charms are fled.”

Tennyson の “In Memoriam”²⁴⁾ にも各所にも見出せます。

杜甫の「国破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心。……」も、芭蕉の「夏草やつわものどもの夢のあと」「卯の花に兼房みゆる白毛かな」も人口に膾炙されているこの種の例であり、日本の詩歌には自然の景物が、その季節を暗示し、連想せしめて、簡単な形式に豊かな内容を与える用法は多いのであります。又季節感が芭蕉以来の俳諧では俳句の形式をとり、季節趣味が著しく発達したことは俳句に興味をもつ人の知るところでありましょう。

第6は “The Poetry of Set Description” であるが、純粋な自然描写、即ち、耳目に訴える外界の事物をありのままに写生するのであります。勿論この種の自然描写には瞑想的、或は物語的な人事的要素が織まれることは度々あり、純客観的自然描写とはいえない例も多いのであります。古代の詩人達は自然を人間と分離して、即ち、自然を独立させて描写することは少なかったものであって、これは近代のことであり、この純粋な自然描写の例を英国であげるなら、James Thomson (1700—1748) を先づ選び出すことになろうと思います。都会文学の風靡した Pope の全盛時代に、あらわれた正しい意味での自然詩の曙光ということができるとあって、Thomson は “The Seasons”²⁵⁾ の “Winter” の第二版の序文に「考えてみるに、自然の業程、詩的情熱、思索や瞑想、道徳的情操を喚起するものはないのである。この変化、この美、この壮嚴は自然以外のどこにもとめ得られない。すべてが靈を拡くし、恍惚とさせる。自然の業を静かに広く見渡す程靈感を与えるものが自然以外にあるだろうか。どのような粧いをなす時にも自然は誠に美しい。」と闡明しています。この詩ではむしろ人間が従属的で、自然が主体であるときえ感じられるようです。

“Let me pierce into the midnight depth Of
yonder grove, of wildest large growth,

That, forming high in air a woodland
quire, Nods o'er the mount beneath. At
every step, Solemn and slow the shadows
blackier fall, And all is awful listening
gloom around. These are the haunts of
meditation, these The scenes where ancient
bards the inspiring breath Ecstatic felt,
and, from this world retired, Conversed with
angels and immortal forms”

この一節などはロマン情調として Wordsworth の先駆ともいえるものであり、又、「春の詩」 (“Spring”) では先づ第一に気候を歌い、更に春の万物に影響する千態万状を述べ、無生物から植物、動物、人類に至ることごとくを詩っています。自然の美に対して憧憬すると同時に、自然の偉大な力に対して畏敬の念を深く心にいだいたのであります。即ち、

“Hail! Source of Being! Universal Soul Of
heaven and earth! Essential Presence, hail!
To Thee I bend the knee; To Thee my
thoughts, Continual, climb; who, with a
master-hand, Hast the great whole into
perfection touched.”

IV

第7は、“Nature contrasted with Man” 「自然が人間或は人生と対照」して現われる場合で、自然と人間或は人生が対比される場合は色々ありますが、先づ第一に、人間の出来事に、或は人間の心情に対して反応を示さない自然の非人間的な悠久無限の一面が強調され、それが人生の須臾にして無力な一面と対照され対比されます。この時、人間の側では無常観が起ります。文学における無常観は日本文学にも外国文学にも現われますが、日本文学には殊に多いようです。「行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。世の中にある人と栖と、またかくのごとし。」²⁶⁾ これは人のよく知る鴨長明の「方丈記」の冒頭であるが、若き漱石を動かして、漱石に英訳を生み出させた格調の高い無常観の文学であります。日本文学を埋める無常観は余りにも情緒的であり、詠歎的な傾向が

強いから、無常観とせず無常感と記すと言った学者もあります。²⁷⁾ この種の無常感は発生的には仏教思想、特に浄土教的思想の影響を重くみるのが通説であるけれども人間本来の性情にもよる面があり、日本文学の一つの特質としても考えねばならぬものと思われまゝ。この特質は万葉集にも王朝文学にも、中世文学にも（中世文学には特に）又、芭蕉にも現われていることは日本文学の読者の知るところであると思います。万葉集からその例を二つ三つひき出すと、「水泡なすもろき命も たく縄の 千尋にもがと願ひ暮しつ」²⁸⁾ 「うつせみの 世のことなれば よそに見し 山をや 今はよすがと 思はむ」²⁹⁾ 「もののふの 八十氏河の 網代木に いさよふ浪の 行方知らずも」³⁰⁾。山上憶良、高橋朝臣、柿本人麿の歌であるが、「うつせみの世」の「はかなさ」を歌っています。最後の歌は人麿の問題作で、単なる叙景歌かそれとも無常感をよみとるべきか両説のあるところだと言うことであるが、とにかく、行方の知れぬ浪に無常の感慨をよみとることができると思います。「月やあらぬ 春や昔の春ならぬ 我が身ひとつは もとの身にして」（業平）。兼好の自然観照においても、「徒然草」で春、夏、秋、冬とそれぞれ趣きが深いと述べてから、しかも真にあわれなのは、実はそのいずれでもなく、四季の推移そのものであると言っております。「花は盛りに月は隅なきをのみ見るものかは」と言う一見逆説的な自然観にも無常の倫理をのぞきみる感があります。「やがて死ぬけしきも見えず蟬の声」これは現世的な俳諧に密着して、しかも、非現世的な芸境にまで昇華させた芭蕉の声であります。

Burns の “To a Mountain Daisy”³¹⁾ 「雛菊」にも Herrick の “To Daffodils” 「水仙」³²⁾ にも見出せる無常感である。Herrick は自然に対して古代ギリシャ人のように一種の汎神教的観念を持っていたようであります。Herrick はキリスト教信者であり、しかも牧師の職を奉じていて、その信仰においてはキリスト教的で勿論あったけれども、外界の自然に対しては純然たる主観詩人となったようであります。単純な詩であるが、儂い花の命によせて人世の哀を歌った「水仙」は人々に愛誦されてきたので、第一節は次の下線を引いた句を除くと全く日本の詩歌と相似ていると言

えましょう。

“Fair Daffodils, we weep to see
You haste away so soon :
As yet the early-rising Sun
Has not attained his Noon.
Stay, stay,
Until the hasting day
Has run
But to the Even-song ;
And, having prayed together, we
Will go with you along.”

第二節となると全く日本の詩歌と、例えば「方丈記」とか「平家物語」の一節を読んでいるのと差がありません。第二節を訳してみると

「われら また命短く
わが世の春のいと短く
一時の栄枯盛衰は
なべてのものに異ならず
汝がごとくみまかりて
乾くこと真夏の雨の如く
或るはまた阿古屋珠なす朝露の
消え去りて 跡もなし」
貫之の歌にも

「秋の菊 匂ふかぎり は かざしてむ 花より
先と 知らぬ我が身を」と言うのがあります。

第8の “The Indifference of Nature” 「自然の無関心或は無慈悲」な態度は、第7との関連があり、社会的抑圧が自然を無慈悲なものとみる見方に輪をかけるのであります。それでこの反動として、かえって、自然と同感し、自然との交友関係を結び、或は自然の中に霊的な意義さえ認める、この事は英国ロマン派詩人に著しいのです。自然を “the Great Mother” と考えることであります。Shelley にとっては、自然は永久の霊の神秘的な顕現であり、Wordsworth にとっては、自然は崇高な神のようなものであり、自然を通じて自然に内在する霊との交渉をもとめたのであります。

第9は、 “The Sympathy of Nature” 「自然の同情」或は自然の愛であり、宇宙万有は、神の創造であり、永劫不変の最高實在であり、鋭敏な直観力を走らせて、その中に幻影をみ、本質的實在を認識しようとするのであります。詩の中に深い

神秘主義が表現されることになります。Blake の
 “To see a World in a grain of sand, And a
 Heaven in a wild flower, Hold infinity in the
 palm of your hand, And Eternity in an hour.”

「一粒の真砂に世界を見、一輪の野花に天国を見る。掌に無限の時を握り、一時に久遠を握む。」
 のであります。日本でも神の観念が強く現われているものがあります。例えば、人麿の「山川も
 よりて つかふる神ながら 滝つ河内に 船出せ
 すかも」³³⁾、この他に人麿の長歌にも短歌にも神
 の観念が現われているのは、日本文学の読者の知
 るところであります。

第10は、“The Subjective Treatment of Nature” 即ち、自然を従属的に取り扱う態度であります。すべての自然が詩人の個人的な感情にしのび込んでいる自然詩の類にこの態度がみられます。自然が詩人の “personal feeling” のなかにしのび込んでいるもので、例えば、東西通じて、秋の景色を “the melancholy reflection” なしには自然をみないような種類のものであります。以上10項に引用した詩文の例には私の好みがでてい
 るかも知れません。

V

Hudson は以上の10項目をあげて最後に次のように書き加えております。

“Speaking broadly, we may say that the interpretation of nature is fundamentally a matter of temperament and mood, and that the investigation of it thus forms part of the personal study of literature. But the subject has its historic aspects also, and in any large survey the spirit of race and the age will always have to be taken into count.”

これは当然な事であって、私は既に、日本文学と英米文学における自然観を歴史的に概観的にそして各作家詩人の自然観をなるべく具体的に「社会学部紀要第20号」に論述したのであります。どうかこの問題に興味のおありの方は拙稿をお読み下さって今日の講演の内容を少しでも立体的におつかみ下さることをかさねてお願いする次第であります。

さて、次にアメリカ文学について、この問題に

関する考察をしなければなりません。アメリカ文学は御承知のように17世紀にはじまるといえますけれども、最初は植民地時代 (1607—1765) , 18世紀後半は革命時代 (1765—1800) であり、次に国家として独立し国民時代になり、それは大体19世紀を占めるのでありますけれども、日本や英国に較べると開国の歴史はいたって短いのであります。従って自然観においても、長い期間にわたっての変遷というものも日英にくらべて極立っているとは言えない訳ですが、アメリカの作家や詩人の中には、自然に対して特に興味と関心をもった人がいるのでありますからこれを決してみるのがす
 訳にはゆきません。とにかくアメリカ初期の植民地時代においては広漠とした自然と戦って行かねばなりません。土地や自然をあまり大切にはしなかった。土地を切りさき、或は土地を侵し、時には土地を破壊した。森を切って燃やし、草原を焼いて掘りおこし、黄金をとるためには清い川をもからしたのであります。この状況を1962年 Nobel 文学賞を受賞した John Steinbeck は “America and Americans” ³⁴⁾ (1966) の第1章と第7章で興味深く書いております。

アメリカの思想の中で、人間観の特色は、アメリカの文学史をたどればわかるように、「人間の霊」に関する問題が主であったので、アメリカ人が democracy や liberty を追求することがアメリカ人の精神のようにみえるけれども、それは所詮アメリカ人の霊の性質を全面的に述べることにならないのであり、democracy も liberty もヨーロッパ旧精神を破壊する道具に過ぎなかったともいえる訳で、アメリカ的な考えとしては、個人が勝手なことをすることは、自由というものではなかったのです。人間は最も深い自己即ち霊が好むことをなしている時のみが自由なのであります。この霊の問題は諸方面に広がって、霊と神や人間や自然との関係を明かにすることからはじまったのであります。自然 (Nature) を愛する文学は一般にロマン主義文学の特色であります。やはりアメリカにおいても19世紀の詩人を待たねばなりませんでした。

William Cullen Bryant ³⁵⁾ (1794 — 1878),
 John Greenleaf Whittier ³⁶⁾ (1807 — 1892),
 Walt Whitman (1819 — 1892) ³⁷⁾ , Joaquin

Miller³⁸⁾ (1841?—1913) 等は自然や田園を歌ったアメリカの詩人の中で忘れることのできない人達であります。Janes Fenimore Cooper³⁹⁾ (1789—1851) の story の中でも興味ある自然描写を発見することができます。19世紀をむかえて、自然生活の賛美者のうち特筆すべきは勿論、Ralph Waldo Emerson (1803—1882)⁴⁰⁾ と Henry David Thoreau⁴¹⁾ (1817—1862) であり、少し下って Emily Elizabeth Dickinson (1830—1886) であります。更に下って Herman Melville⁴²⁾ (1819—1891) の “Moby Dick” (1851) の中では海という自然をとりあつかっていますから、Melville の自然観を読みとることができます。又 Nathaniel Hawthorne⁴³⁾ (1804—1864) の小説の中にも、Hawthorne の「自然」の取り扱い方を読みとることができるのです。Henry James⁴⁴⁾ (1843—1916) の小説中にも自然が描かれるが、James の場合は、その秀れて美しい自然描写も多くの場合、人物の背景として出現するのであります。又、Whitman と全く同時代であった James Russell Lowell⁴⁵⁾ (1819—1891) も自然詩人としての面もあったといえます。現代詩人 Robert Frost⁴⁶⁾ (1874—1963) の詩にも自然を取り扱ったものがあり、初期の詩集 “A Boy’s Will” (1913) の中にも、“A Witness Tree” (1942) その他にも自然詩人としての面が現われるのであります。

以上の作家詩人の中でも特に取りあげたいのは、Emerson と Thoreau と Dickinson であって、その中でも Thoreau は特にアメリカ的な特徴が（東洋的なところも多分にありますが）ある作家で比較的詳しく述べなければなりません。

Emerson は、世界を単一の霊の表現と見るならば、私達はこの世において孤立する物は一つとして無く、一切の分離分割は外見であって、宇宙はその奥所において血縁につながる不可分の渾一体であるとみななければならぬという見解をとるのであって、これは Emerson の「全体」“wholeness” の教えにつながるものとみることが出来ます。自然においても人間においても、自存力の多いもの程実存の程度が高いのであって、これは Emerson の自持の説につながるのであります。個人は神の具現であり、神の属性であって、絶対

的価値である真善美の方面において、個人は奇蹟を成しとけるだけの素質を持っているから、人は己を信頼しなければならないと言うのであります。この思考は “The American Scholar” のアメリカ文化独立の論につながるものであり、神を過去でなく、現在と現実の中に置けと忠告するのであります。自然界及び社会における一切の現象は、神の刻々の啓示であって、無限者そのもの、及び活動をのぞき込む窓であり、又精神的なものの象徴物或はその相対物であるという見解をとるのであります。重要なのは自然の啓示の方面であって、自然による霊の訓練であり、自然界の事実はその自身のために在るのではなくて、精神的、象徴的になんらかの観念を具現するために存在するのであります。自然の法則も人間と関連してはじめて愉快に活動するのであります。Emerson によれば “symbolism” とは自然の事実の人間化に外ならないのであって、そこから自然を研究せよ、「己を知れ」と言うことが生れるのであります。従って、Emerson の場合、眼に見える世界は単に神の symbol であり、その symbol の解説は科学や神学ではなく、個人が自由に個人の力でなすことを意味すると考えられるのであります。自然は一つの思考 (“thought”) の具象物であるから自然は再び思考に戻るものであるということになります。次に Emerson の著作の中から自然に関する言葉をひろってみることにしましょう。

「自然はかつて賢者の玩具となったことはないのである。花も動物も山も、幼少時代の単純な心を喜ばしたと同様、賢者の円熟の時代の智慧を反映した」

「真実を言えば、成人で自然をみることでできる人は殆んどいない。大抵の人は太陽をみない。少くとも成人は極めて浅薄な見方をしている。成人の眼を太陽はただ照らすだけだが、子供の心と眼の中には太陽の光が射し込んで行く。自然を愛する者とは、その内面的と外面的な感覚が猶互に真正な調和をなしている人間のことである。幼時の精神を成人の時代にまで保ってきている人間のことなのである。」

「感覚的な人は思想を事物に適合させるのである。詩人は事物を自分の思想に適合させるのである。」

る。感覚的な人は自然を根の生えた固定したものと見るが、詩人はそれを流動するものと見て、その上に自分の存在を印するのであり、この困難な世界も、詩人にとっては、素直な柔軟なものとなる。塵や石を人間性がくるみ、これを理性の言葉とする。想像とは、理性が物質界を使いこなすことであると定義してもよいだろう。」

VI

Concord で生れ、Concord で育ち、自分の肉体を Concord に帰した Thoreau は Concord の自然（アメリカの自然）に密着することによって自然を観察したのであり、しかもその観察は甚だ実践的であり具体的で、精緻な博物学者の態度に等しかったとさえ言えるのであります。師であった Emerson の “Over-soul” の説と合致するところがあり、又 東洋的な 特徴があったとしても、Thoreau には Thoreau の特徴があったのであります。Thoreau の精神は自然に帰ることによって自然を観察しようとしたので、その自然観は、アメリカの古典となっていて多くの読者の知る “Walden, or Life in the Wood”⁴⁷⁾ (1854) を主に、“A Week on the Concord and Merrimack River” (1854), “The Main Woods” (1864), “Journal” (14 vols, 1906) その他に読みとることができるのであります。Henry James (1843—1916) は “Hawthorne”⁴⁸⁾ (1879) の中で、Thoreau に関して次のように述べているところがあります。

“Henry Thoreau, a dilightbul writer, went to live in the woods; but Henry Thoreau was essentially a sylvan personage, and would not have been, however the fashion of his time might have turned, a man about.”

James のこの言葉のように、Thoreau は結局森の住人であって、時代の流行がどのように変わろうとも、社交家にはならなかったであります。Thoreau 自身の言葉にも 次のようなのがあります。

“I had this advantage, at least, in my mode of life, over those who were obliged to look abroad for amusement, to society and the

theatre, that my life itself was become my amusement and never ceased to be novel. It was a drama of many scenes and without an end”⁴⁹⁾

Thoreau は人間の交際に失望したのであり、世間のいわゆる 交際は多くは浅薄であって心に触れるものがなかったのであります。自然は Thoreau にとって無二の師友であった訳です。

“This is a delicious evening, when whole body is one sense, and imbibes delight through every pore. I go and come with a strange liberty in Nature, a part of herself.”⁵⁰⁾

Thoreau は自然を自らの皮膚と霊とで感じ取っているようで、自然に関しては実に鋭敏な感覚を働かすのであります。次の例もその一つであります。

“Like the water, the Walden ice, seen near at hand, has a green tint, but at a distance is beautifully blue, and you can easily tell it from the white ice of the river or the merely greenish ice of some ponds, a quarter-of-a-mile off.”⁵¹⁾

1938年 Merrimack 川の奥地を旅行した時に自然は自己投影の対象であって、現実難脱の夢を追うに過ぎなかったものと言えるでしょうが、

“Walden” の自然への接し方は、只単なる森の生活でなく、「自然」と「我一人」と共に生きる実験にふさわしい場としての自然であったと言えるので、自然と共に生きることは、実験に直面してみなければ予測を許さない意識そのものの実体であったのであります。Thoreau はそれだから観念化された自然像から離説して、多様な実体群を細心緻密な観察力をもって解体してみようとさえしたのであります。“Walden” はその記録であり、そしてその記録が最も力強いそして最も効果的な言葉で書かれているのであります。

Walter Harding も “He (Thoreau) is honored as a writer, as the creator of some of the most powerful, most effective prose in our language, and as the author of one of the truly great classics of American literature, Walden.”⁵²⁾ と称賛しております。

次に Emily [Elizabeth] Dickinson⁵³⁾ (1830

—1886) についてであります。Dickinson は詩によって「自然」を歌い「生」或は「愛」の世界を歌い、「死」を歌い又「永遠」を歌いました。Transcendentalist であった Dickinson は、前述の Thoreau が Walden 湖畔で隠者の生活を送って、都会を離れたように、生地である Massachusetts の Amherst の自宅で終生暮したのであります。“Emily Dickinson was a poet as well as a woman, and we must reckon both with her artistic detachment and with her dramatization of moods. Surely, her love poetry was not, like Emily Brontë's, without factual basis. Love, frustration, and death she tasted with all the eagerness of a sensitive spirit. She lived on, in her garden, in her chamber, more and more the dinizen of a metaphysical dormain of her own.” (“Literary History of the United States” p. 909)⁵⁴⁾、又、Dickinson 自身の詩句で言えば “I have no life but this, To lead it here; Nor any death, but lest Dispelled from there; ……” であり、Amherst の自宅で瞑想し詩作していました。自然を描く時にもその感覚は研ぎ澄まされ、しばしば wit によって謎のように表現され、空漠な精神の象徴として表現されます。けれども Allen Tate (1899) が指摘したように、Emily Dickinson は John Donne (1572—1637) と同様、自然界の考え方も、特定の厳格な思想態度で鈍らせられていないのであります。思想や抽象概念や、又教育や知的遺産といったものが、自然にいたずらに没頭させたり、個人的な素質を無統制にさせたりしなかったのであります。『『自然』は私たちの見るもの 丘と午後 栗鼠 日蝕 そして熊蜂——……』などと言う詩句の中にもそれが読みとれます。次に「自然」をやさしい母とみている “Nature, the Gentlest Mother” を引用して Dickinson の自然詩を味わっていただきましょう。

“Nature, the gentlest Mother,
Impatient of no child,
The feeblest or the waywardest, —
Her admonition mild

In forest and the hill

By traveller is heard,
Restraining rampant squirrel
Or too impetuous bird.

How fair her conversation,
A summer afternoon, —
Her household, her assembly;
And when the sun goes down

Her voice among the aisles
Incites the timid prayer
Of the minutest cricket,
The most unworthy flower.

When all the children sleep
She turns as long away
As will suffice to light her lamps;
Then, bending from the sky,

With infinite affection
And infiniter care,
Her golden finger on her lip,
Wills silence everywhere.”⁵⁵⁾

Ⅶ

さて、いよいよ、この講演の締め括りをしなければならない段階にきたようであります。およそ人間は、或る時は自然を求め尊び、又或る時は自然を嫌い避ける二つの傾向があるようであります。与えられた個人、又は社会によってその要求が異って来るでしょうし、自然を科学者がみるのと文学者（詩人）がみるのとは自然に対する態度は異っているでしょう。詩人の関心事は土地の開発でもなく、更には土地の価格でもなく、その下に埋蔵されている鉱石でも石油でもないであります。科学が目的とする自然の因果律に特に関心をもつのもなく、自然の形態や色彩に関心をもっても形態学にも生物学にも立入らない、ともかくも文学は自然の美を索める傾向が甚だ強いのであります。Nature に対する詩人の情緒の反応であります。

又、芸術（文学）には風土的性格というものがあり、芸術家（文学者）の「気合い」のなかには志向というものがあって、自然をみるにしても、合理的にみるか非合理的にみるかの相違があらわ

れてきます。概括的に言うと和辻哲郎著「風土——人間学的考察」⁵⁶⁾の中の指摘のように、「ヨーロッパにおいては、温順にして秩序正しい自然はただ『征服されるべきもの』、そこにおいて法則の見いださるべきものとして取り扱われた。……人はその無限性への要求をただ神にのみかけて自然にはかけぬ。自然が最も重んぜらるる時でもたかだか神の造ったものとして、あるいは神もしくは理性がそこに現われたものとしてである。しかるに東洋においては、自然はその非合理性のゆえに、決して征服され能わざるもの、そこに無限の深みの存するものとして取り扱われた。人はそこに慰めを求め救いを求める。特に東洋的な詩人芭蕉は、単に美的にのならず倫理的に、さらに宗教的に自然に対したが、そこに知的興味は全然示さなかった。自然と共に生きることが彼の関心事であり、従って自然観照は宗教的な解説を目ざした。……人はかかる自然に己れをうつし見ることによって、無限に深い形而上学的なものへの通路をさし示されていることを感ずる。偉れた芸術家はその体験においてかかる通路をつかみ、それを表現しようとするのである。」

Renaissance 以後を考えると、アメリカ文学の初期にも共通なところがあるようですが、慣れ親しめる自然よりも、好奇心、冒険心をそそり、自然を克服する時に感じる強烈な喜びのようなものを感じる傾向は強いということができましょう。この傾向は現代の日本の青年のいづく自然への態度にもみられましょうが、ロマン派詩人によって歌われた崇高な力にみちた光景に対する驚異心、或は冒険心が主になっているように思われます。この事は既に土居光知著「文学序説」に指摘されたことであります。

西欧では美しく自然が復活するのは、中世が過ぎて Renaissance の詩人たち、殊に英国では、Shakespeare その他それから18世紀の Collins, Cowper その他であり、さらに19世紀初頭の Clare, そして Collins, Gray, (この二者は Thomson の美的鑑賞と異って、Goldsmith と同様、自然に対する感懐が人事と密接に関連していたが) Shelley, Byron, Keats, Wordsworth 等を経過してからであります。Thomson の“The Seasons”の影響があつて、近代のヨーロッパ文学(殊に英

国ロマン派)には、東洋的な傾向、即ち、自然を自然そのものの為に愛する特徴が生れたといえましょう。人工美を離れて、田園の自然美をつかむ心が強くなったのは西欧では周知のように Rousseau の“Retrn to Nature”の頃からであります。

概括的に言つて、西欧の文学者は、日本の文学者の場合と同様に、自然を自然として、美の対象として描く相似点があると同時に、相異点の一つは、自然を通して神の恩寵を現わすことが多いのであります。これは時に神秘を暗示することにもなります。又西欧の文学者は自己の哲学観なり人生観なりを表白します。そして背後にキリスト教との関連があり、ヨーロッパ人が自然“Nature”というときは、日本人の様に花鳥風月といった外界の自然を指すばかりでなく、それよりもキリスト教の影響から一つの完全な世界の観念を指していることは相異点として重要なことでありましょう。

自然に対して最も深い想念をいだいた二大詩人、一人は英国の Wordsworth、一人は日本の芭蕉をとってみると、その自然観照の深遠さについては甚だ共通の点があります。芭蕉は西行よりも更に Wordsworth 近似しております。私達は芭蕉の俳句を通じて、芭蕉が自然の奥に潜まる妙な響に耳を澄して自然の神髄をみつめた態度、自然の中に自分を投入した態度を「それ天地は風雅なり 万象も亦風雅なり」の中にみることができまう。自然を楽しんで、その中に流れている普遍的な生命をとらえて、本当の人間性に立ち帰ろうとする態度、「自然に帰る」こと、芭蕉の言葉で言えば「造花に従い造花に還れ」という事ではこの二大詩人は充分の相似点をもっています。桎梏拘束から離れて、変形された人生の姿から脱出して人間本然の姿に立ち還れということはこの二大詩人の理想であつたのです。この点は相似点といえますが、それが詩句に表現されている面、即ち表面的に相異点がありましょう。これは英国の自然と日本の自然との相違、つまり風土の相異もありましょうし、又、人情風俗の差異もあり、思想的には(哲学的には)キリスト教の背景と仏教的な影響のあることを考慮に入れなくてはならないでしょう。このキリスト教的雰囲気と仏教的色彩とは確かに二者の相異点と考えない訳にはゆきませ

ん。ここで芭蕉の「寂」の問題を考えてみなければならぬかも知れません。「うき我を寂しがらせよ閑古鳥」芭蕉は邪念妄想を去って静寂の心持に回帰しようとするのであります。一方 Wordsworth にも次の “To the Cuckoo” 「閑古鳥に」というのがあります。第一節と第八節をここに引用してみます。

“O Blithe New-comer ! I have heard,
I hear thee and rejoice.
O Cuckoo! shall I call thee bird,
Or but a wandering Voice ?

O blessed Bird ! the earth we pace
Again appears to be
An unsubstantial, faery place ;
That is fit home for Thee ! ”

閑古鳥の声をきく Wordsworth は「寂しがらせよ」と言うのでなくて、閑古鳥を悦んで迎えているので、一羽の小鳥の声ではなく “Wandering Voice” 「さまよう声」であって、その声は現実の世界から遠い過去、即ち幼い頃の「幻影多かりし時代」に伴い帰えしてくれる声であるのであります。物を見るがままに信じ、信じるがままに行動する、真善美が混然と一つになっている幼年時代で、永遠の波がこの世の岸辺を洗っていると認識した Platon (ca. B. C. 429—347) の哲学にも似たもので、Wordsworth は幼年時代は人間の靈魂が天界から降りたばかりであるから、前世の記憶が新らしく、脳裡に浮ぶ信仰や、判断は大人や哲学者の及ばない程真実であり高貴なものであるというのであります。それで、「幸多い鳥よ、この踏む大地が、おまえが住むにふさわしい現実ならぬ精霊の場所のような気がする」のであります。生命の本然の姿は幼年の心のうちに留まっていて、幼子様になってはじめて神の国を見ることができるといのであります。Wordsworth には有神的な信仰と敬虔な “optimism” というものがあつたように思われます。

最後に、更に英米文学に扱われる自然の特徴が概して、女性美を通して、或はそれに連想されて表現されることであります。Nature は Feminine Gender として取り扱われることであります。アメリカの Dickinson も「やさしい母である自然

の……」と言い、英国の Byron が “Childe Harold’s Pilgrimage” (Ⅱ. 37) で自然を “The Kindest mother”⁵⁷⁾ と呼んでいるように、大地を “The Great Mother” と考えております。

さて、いよいよこの最終講義を終らねばなりません。今後、私に神がどの位の余命を与えてくれるのか計り知れませんが、私は最後の息を引きたるまで、人を愛し、自然を愛し、芸術(文学)を愛し、言葉を愛し続けて行くことでありましよう。これで私の拙い最終講義を終わります。このように多数の方々が御参集下さいまして、長時間御静聴下さいました事を厚く御礼申し述べます。どうもありがとうございました。(1970. 4. 22)

注1) 拙稿

- a) 「文学の研究〔Ⅰ〕——『文学とは何であるか』の難問と『鑑賞・批評』の課題——」(関西学院大学「社会学部紀要」第16号, 昭和43. 3. 25)
- b) 「文学の研究〔Ⅱ〕——『文学』と『言語』・文学(芸術)の言語——」(関西学院大学「社会学部紀要」第17号, 昭和43. 11. 1)
- c) 「文学の研究〔Ⅲ〕——異質文化接触の問題・外国文学の研究——」(関西学院大学「社会学部紀要」第18号, 昭和44. 3. 25)
- d) 「文学の研究〔Ⅳ〕——翻訳論・外国文学研究と翻訳の問題——」(関西学院大学「社会学部紀要」第19号, 昭和45. 1. 31)
- e) 「文学の研究〔Ⅴ〕——文学と自然・外国(英米)文学と日本文学における自然観(1)——」(関西学院大学「社会学部紀要」第20号, 昭和45. 3. 28)
- 2) “An Introduction to the Study of Literature” by William Henry Hudson. George G. Harrp. 1912.
- 3) 注1) a)
- 4) “The Canterbury Tales” (主として1387—1388) by Geoffrey Chaucer (1340?—1400) “The poeical works of Chaucer” by E. N. Robinson. Oxford, n. d. (1933)
- 5) 山部赤人, 生没不明, 「万葉集」巻3・6・8に長歌13首, 短歌38首を伝えている。自然観照の方向を進め、人間や生活から切りはなされた自然美の世界を確立した。日本文学の自然観に根づよい伝統を形づくり、後世に影響を与えた。
- 6) 大伴家持(718(養老2))—785(延暦4年))

- 7) "Ode to a Nightingale" by John Keats (1795—1821)
- 8) "To the Daffodils" by William Wordsworth (1770—1850)
- 9) "The Story of My Heart : my autobiography" (1883) by Richard Jefferies (1848—1887)
- 10) "Sohral and Rustum — An Episode" by matthew Arnold(1822—1888). 1853年に Longman, Brown, Green, and Longmans から出版された "Poems. By Matthew Arnold. A New Edition" の巻頭を飾っている詩。
- 11) 本居宣長 (1730(享保15))—1801(享和1))
- 12) 大伴坂上郎女, 生没年不明「万葉集」に長歌6首・旋頭歌1首・短歌77首がある。自然の歌・挽歌・宴歌・祭神の歌・愛の歌等多方面の作がある。
- 13) "The Cloud" by Percy Bysshe Shelley (1792—1822) この詩は1820年に書かれた。Shelleyの想像力が雲の生命のうちに融け込んでいて、雲に関連する現象をいきいきと描き出している。詩人自身の感情が移入されないで詩人自身が雲と同化している。
- 14) "The Sick Rose" by William Blake (1757—1827)
- 15) "The Elegy witten in a Country Churchyard" by Thomas Gray (1767—1771) この挽歌の翻訳は遠く矢田部尚今居士の「グレー氏憤上感懐の詩」から近く 福原麟太郎博士の訳詩「墓畔の哀歌」があり、猶同博士の "Essays on Thomas Gray" 「トマス・グレイ研究抄」は日本学会が文学的にも書誌学的にも誇り得る最高の研究書。
- 16) "The Deserted Village" (1770) by Oliver Goldsmith (1730?—1774)
- 17) "The Idylls of the King" (1859) by Alfred Tennyson (1809—1892)
- 18) "Enock Arden" (1864) by Alfred Tennyson.
- 19) "Don Juan" (1819, 1821, 1822, 1823, 1824) by George Gordon Byron (1788—1824)
- 20) 「源氏物語」物語55巻, 作者紫式部。成立の時期については昔から異説が多い。11世紀の初頭, 平安時代の最盛期になった長篇小説。自然・人生の背景描写の精細さ, 深い陰翳と優雅な品格において世界的古典の列に加えられるもの。
- 21) 「自然と人生」(31歳の作) 徳富蘆(芦)花 (1868(明治1年))—1927(昭和2年))
- 22) 「武蔵野」(明治34年3月) 国木田 独歩 (1871(明治4年))—1908(明治41年))
- 22) "Tess of the D'Urbervilles"(1891) by Thomas Hardy (1840—1928)
- 23) "Childe Harold's Pilgrimage : a Romaunt." (1812, 1816, 1818) by George Gordon (1788—1824)
- 24) "In Memoriam" (1850) by Alfred Tennyson (1809—1892) "Tennyson — In Memoriam" Edited by Takeshi Saito. 昭和41年6月, 研究社
- 25) "The Seasons" (1726—1730) (Winter, 1726 ; Summer, 1727 ; Spring, 1728 ; Autumn, 1730) by James Thomson (1700—1748)
- 26) 「方丈記」(1210年前後) 鴨長明 (1153(仁平3年))—1216(建保4年))
- 27) 「無常感の文学」小林智昭著, pp. 5～6. (昭和40年6月, 弘文堂)
- 28) 山上憶良の歌, 山上憶良 (660～733(天平5))年没?) 「万葉集」に長歌10首・施頭歌1首・短歌50首。
- 29) 高橋朝臣の歌, 生没年不明。
- 30) 柿本人麿, 生没年不明。
- 31) "To a Mountain Daisy" by Robert Burns (1759—1796) Poems chiefly in the Scottish Dialect (including The Twa Dogs, Halloween, The Vision, Address to the Devil, The Cotter's Saturday Night, To a Mouse, To a Mountain-Daisy, etc.) Kilmarnock. 1786.
- 32) "To Daffodils" by Robert Herrick (1591—1674) Hesperides and Noble Numbers (including To Daffodils, To Meadows, To the Virgins, His Litany to the Holy Spirit, etc.). 1648.
- 33) 柿本人麿の歌。
- 34) "America and Americans" (1966) by John Steinbeck (1906—1969)
- 35) William Cullen Bryant (1794—1878) 清純で厳肅なピュリタンの詩作品がある。Poems (including Thanatopsis [1817], To a Waterfowl [1818]). 1821. Poems (including The Death of the Flowers, To the Fringed Gentian, Mutation). 1832. The Fountain and Other poems. 1842. The White-Footed Deer and Other poems. 1844. A Forest Hymn. 1860 その他がある。
- 36) John Greenleaf Whittier (1807—1892) 田園の

- 自然を歌った詩が多い。New England の農村の平和な姿を描いた “Snow-Bound : a Winter Idyl” (1866) がある。その他 自然に関するものでは、Home Ballads, Poems and Lyrics (including skipper Ireson's Ride and Telling the Bees). 1860. Tent on the Beach, 1867. Among the Hills. 1869 その他がある。
- 37) Walt Whitman (1819—1892). “Leaves of Grass” (1855) Enlarged in 1856, 1860, 1867, 1871, 1872, 1876, 1881, 1882, 1888, 1889 and 1891.
- 38) Joaquin Miller (1841?—1913) アメリカの西部地方を歌った詩人で “The Byron of Oregon” 「オレゴンのパイロン」と賞賛された。“Pacific Poems” (1870) その他がある。
- 39) James Fenimore Cooper (1789—1851). “The Last of the Mohicans”(1826). “The Prairie” (1827) その他がある。
- 40) Ralph Waldo Emerson (1803—1882). “Nature” (1836). “The American Scholar (1837). その他がある。
- 41) Henry David Thoreau (1817—1862). “A Week on the Concord and Merrimack Rivers. (1849). “Walden, or Life in the Woods”. 1854. “Journals. 14vols. “1906 その他がある。
- 42) Herman Melville (1819—1891). “Typee : a Peep at Polynesian Life”(1946). “Moby-Dick: or, the Whale” (1851) その他がある。
- 43) Nathaniel Hawthorne (1804—1864). “The Scarlet Letter” (1850). “The House of Seven Gables” (1851) その他がある。
- 44) Henry James (1843—1916). Henry James に関しては拙稿 30 篇 (「関西学院大学「英米文学」「論放」「社会学部紀要」その他)を参照の事。
- 45) James Russell Lowell (1819—1891) 批評集の他詩集がある Poems. 1844. Poems. Second Series. 1848. の他がある。“To the Dandelion”, “The First Snow Fall” は詩の読者の知るところである。
- 46) Robert Frost (1874—1963). New England 殊に New Hampshire の自然を歌い、自然の中に「生」の象徴的な意味を捕えている。“New Hampshire (1923). “Collected Poems” (1930) などで Pulitzer Prize を受けた。1949 年にも “Collected Poems” を出している。その他詩集がある。
- 47) 筆者はこの作品に関して、関西ソー協会研究会で詳細に論述した。
- 48) Henry James の “Hawthorne” は作家が作家を論評した最も秀れた Hawthorne 論である。
- 49) 50) 51) “Walden, or Life in the Wood” (1854) 中より引用。
- 52) “The Thoreau Centennial” (1964) Edited by Walter Harding. State University of New York Press.
- 53) Emily Dickinson (1830—1886). 多くの詩集があるが、“The Poems of Emily Dickinson. 3vols.” Ed. Thomas H. Johnson. 1955. に Dickinson の詩が集められている。
- 54) “Literary History of the United States” Editors Robert E. Spiller. Willard Thorp. Thomas H. Johnson. Henry Seidel Canby. Richard M. Ludwig. Third Edition : Revised (1963). The Macmillan Company. New York.
- 55) 注53)
- 56) 和辻哲郎著「風土—人間学的考察」岩波書店発行
- 57) “Childe Harold's Pilgrimage” (Ⅱ. 37) “Dear Nature is the Kindest mother still, Though always changing in her aspect mild ; From her bare bosom let me take my fill, Her never-wean'd, though not her favour'd child.,,.....”